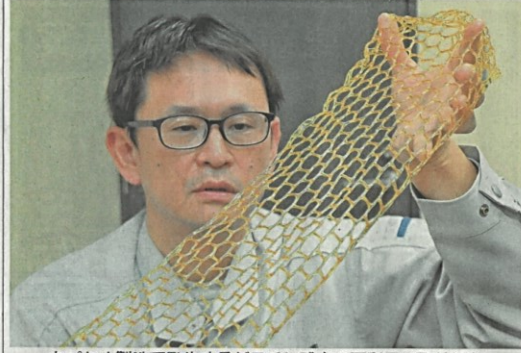


## 中日本カプセル (大垣市)



# 「ゼラチン残さ」を再利用



カプセル製造で発生するゼラチン残さの再利用に取り組む  
須原渉開発部長＝大垣市荒尾町、中日本カプセル



液状や粉状に加工された  
ゼラチン残さ

## 年300ト発生、肥料や接着剤に

黄金色に輝くネット状のシート。製品ではなく、サプリメントなどソフトカプセルの製造工程で発生するゼラチンシートの残さだ。中日本カプセル(大垣市荒尾町)では、年300ト発生するゼラチン残さを肥料や接着剤として再利用する取り組みを進めている。ゼラチンとリサイクルを合わせ、「ゼライクル」と名付けた事業。2021年から本格化し、それまで廃棄処分していた残さの再利用率は近年7割を超える。今夏には本社敷地内に専用工場を立ち上げ、28年までのリサイクル率100%を目指す。

20年)から開発部を中心に再利用のプロシエクトを推進。窒素を7%以上含むため、肥料原料としての活用を目指す。液状や粉状に加工して肥料メーカーに販売する。住宅用建材やカーに販売する「にかわの薬器などに使われる「にかわのゼラチン」の原料としても供給。取引先は20社を超えるまでに成長した。「再利用で処分費が浮くほか、焼却時に発生する温室効果ガスも削減できる」とプロシエクトリーダーの須原渉開発部長(46)は語る。

「社員の中で廃棄物の有効活用を促す意識が生みだされた」と山中利恭社長(6)は手応えを語る。「最近では新卒の採用面接でも『SDGsについて何に取組んでいますか』と質問されることがあります」。当社の理念は健康社会への貢献。ゼライクルは環境負荷を低減し、健康な社会づくりにも寄与する」と強調する。

政府は、原料の多くを輸入に依存する化学肥料の使用量を50年までに30%削減する目標を掲げ、国内資源の有効活用を打ち出す。同社は昨年3月、農林水産省のみどりの食料システム法に基づき基礎確立事業の認定を受けた。28年までの5年でゼラ

イクルの栽培実証試験や販売の強化、生産設備の増強などを進めるとし、大垣養老高校(養老郡養老町)と協力して稲作実験に乗り出したほか、行政や大学と連携した各種の実験も進めている。

須原部長は「従来の有機肥料と比べても問題なく使えることが分かった。さらに科学的なエビデンスを拡充し、より効果的な活用策を探る」方針を込める。今春には、実験を通してゼライクルに共感した大垣養老高校の生徒が入社する。環境負荷の低減にとどまらず、社会課題の解決や人材教育の推進にまで効果を見せるゼライクルの「環(わ)は、今後さらに大きく広がります」。

(宮本寛)